でござる　甲賀忍者

ますます勝手に関西遺産

者たち。華麗に走り抜けるくノーも＝滋賀県甲賀市、滝沢美穂子撮影

忍者の里といえば、伊賀と甲賀である。小説や漫画の世界では、どちらかといえば伊賀が脚光を浴び、甲賀は脇に寄せられてきた。しかし戦国の世から400年余、現代の忍びを志す者たちは甲賀をめざす。

10月、大阪の会社員、曽野良平さん(31)は、滋賀県甲賀市に入ると黒の忍者服に身を包み、忍者「ねこへい」に変身した。忍術日本一を争う「全日本忍者選手権大会」に参戦するのだ。今年で29回目。定員100人の枠は、受け付け開始から3週間で埋まった。

屋敷に忍び込む技を競う「城壁登り壁づたい」では落下者が続出。両足に浮輪をつけ池を渡る「水蜘蛛」でも、多くが水中に没した。優勝した京都の「藤丸」(35)は「うれしいでござる」とニヤリ。一方のねこへいは6位。「忍びの世界は奥が深い。また挑戦します」と、会社員の姿に戻り大阪に帰った。

かつては市川雷蔵主演の映画「忍びの者」やテレビ「仮面の忍者赤影」、「忍者ハットリくん」から最近では「NARUTO―ナルト」まで、忍者人気は衰えを見せない。

甲賀忍者が歴史の表舞台に現れたのは室町時代の1487年。近江・六角氏の忍びの衆が、9代将軍足利義尚の討伐隊に奇襲をかけ、さんざん悩ませたという。戦に加わった家々は「甲賀五十三家」と呼ばれ、甲賀忍者の源になったとされる。

だが、闇で跳梁跋扈する忍者の存在を疑う向きもある。「〈甲賀忍者〉の実像」（吉川弘文館）を著した歴史研究家の藤田和敏さんは「現代に残る史料は、忍者の存在を証明するには不十分」と指摘する。私たちが抱く忍者像は、江戸時代の甲賀の人たちが作りあげた虚像、というのだ。

そんな論争をよそに、甲賀の里は忍者ブームで盛り上がる。「忍者検定」も毎年開き、今年6月も「忍者に一番肝心な精神は」といった問題に6～76歳の100人が挑んだ。

会場には「最後の忍者」と呼ばれる福井県若狭町の川上仁一さん(63)が現れ、「平成の忍者・忍術を語る」と題して講演した。

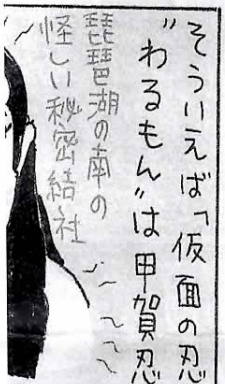
甲賀武士の末裔という老人に忍術を習った。修業は「これで全部や」と告げられる18歳まで続いた。研鑽を積むうちに評判が広まり、ライバルの伊賀に招かれ伊賀流忍者博物館名誉館長を務めるほか、三重大特任教授として「忍術学」を研究する。

「忍びの道は実利主義。命よりも名誉を重んじる武士道に対し、忍者は生きて帰らなければ仕事にならない。現代的な思想なんです」

いまだ謎の多い忍びの実像。しかし今に伝わる忍者のサバイバル精神は、混迷の時代に生きる現代人を引きつけてやまない。

（柏崎歓）

メモ　甲賀の里にある「忍術村」では忍者屋敷の見学のほか、忍者道場もある。大人千円、中高生800円、小学生700円、幼児500円。☎0748・88・5000。



会・グレゴリ青山

の推薦、哲夫に聞け
ァクス〉06・6231・
asai@asahi.com